



桑原武夫集  
9

1974  
}  
1977

岩波書店刊行

桑原武夫集 9

第九回配本(全十卷)

一九八〇年二月一八日 発行

定価四〇〇〇円

著者 桑原武夫\*

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五  
電話 〇三二六五四二一  
振替 東京六一六二四〇

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

© 桑原武夫 1980

## 凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によった。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには\*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目次

凡例

一七四 論語……………2

現代日本文明について……………235

本当の政治論……………265

今西錦司について……………271

ニーダム博士と私……………282

一七五 中江兆民の洞察……………288

おのずと……………292

丸山薫弔辞……………295

シルクロードの旅から……………299

元号について	315
トルコの印象	335
トインビー『図説歴史の研究』について	357
一九七 日本論壇の弱点	368
町の美観は誰のものか	386
文学における悪	389
柳田国男『遠野物語・山の人生』解説	425
内藤湖南『日本文化史研究』解説	439
壮絶な準備	450
青果雑感	454
一九七 西洋音楽と中国・日本	462
天下の大勢	467
達人	474

目次

マルローについて	483
知的関心としての民族学	497
私の敦賀	501
左派の長者	505
都のかたち	513
竹内さんと私	520
自 跋	529
挿絵目録	545

1974



竜瓦当(西川孟写)



論語

目次

はじめに	3
学而第一	26
為政第二	51
八佾第三	76
里仁第四	86
公冶長第五	103
雍也第六	135
述而第七	172
泰伯第八	191
子罕第九	204
鄉党第十	228

## はじめに

### 一

伊藤仁齋が「最上至極宇宙第一の書」とたたえた『論語』は中国の古典中の古典であって、『毛沢東語録』のあらわれた今は知らず、二千年以上のあいだ、中国において最も多くの読者をもったばかりでなく、日本、朝鮮、安南、西域等にも普及して、東アジアの人々に最大の影響を与えた書物であることはいりまでもない。これが「中国詩文選」に収録されることは当然至極だが、しかし、それがなぜ私によって担当されているのであろうか、読者はおそらくそこに疑問をいだかれるであらうし、私自身としても、一言お断わりをしておきたい気がするのである。いささか私事にもわたるけれども。

一昨年（一九七二年）末、「中国詩文選」の企画がたてられたとき、筑摩書房から、監修の吉川幸次郎、小川環樹の両先生が、『論語』は桑原にと言われるので、お引き受け願いたいとの申し入れがあった。私は辞退した。すると、吉川君から再考してほしいという電話があった。一昨年の春、同君がNHKで対談形式による中国文学についての連続講義をした際、私は『論語』でお相手をした

ことがある。私はその準備をするのを好機として、五十年ぶりにこの古典を全巻通読してみようと思いたった。もちろん、漢文のテキストだけではどうにもならない。吉川君の注解(筑摩書房『世界古典文学全集』と、貝塚茂樹君の現代語訳ならびに注解(中央公論社、世界の名著『孔子・孟子』)を併読していったのである。旧友の作品でほめにくいのが、この両著によって『論語』学に一時期を画する進歩がもたらされたことは、素人の直観として私の確信するところである。その読みのきめのこまかさと、行文の明晰さによって、『論語』が現代日本人の感覚にぴたりするものとなったといえる。はじめ多少の義務感をもって出発した私の試みは、やがておもしろさに引きずられるようになり、知的清遊の後味を残して完了された。放送での私の発言は粗雑なものであったが、通読中にいだいた二、三の疑問について吉川君にただしたことがある。専門外の人は専門家の気がつかぬような点を気にするものだな、などと言いながらいろいろ教えてくれたのだったが、そのときの全巻読了という事実の記憶だけが彼の頭に残っていて、私の起用を着想せしめたものらしい。

私は、光栄のようではあるが、企画を見ると、全二十四巻の執筆担当者は、すべて中国文学の専門家ばかりだ。そのなかへ素人が一人まじって、調子はずれの一巻をこしらえるのは恥ずかしいし、また企画全体の品位を落とすことにもなりかねない。堪忍してほしい、とこたえると、吉川君はしつこくは言わなかった。

それから一月半、突然同君から電話をもらった。『論語』はやっぱり引き受けてください。じつ

はね、昨晚、貝塚君に会ったとき(中国学者たちの集まりがあったらしいのだ)、あの話をしたら、『論語』を桑原に頼むのは大賛成だ、と言うんです。情勢は変化しましたよ、引き受けてください。なるほど情勢は変化しました。私は観念して、とやかく言わず、ただ、やってみましょう、と答えた。ここで「之れを用うれば即ち行なう」という語句を想起するのはあつかましますすぎるかもしれないが、「暴虎馮河」のそしりをも甘受しようという気になったのである。

二

私が『論語』にはじめて接したのは、中学一年生のときであった。私のいた京都一中では、そのころまだ漢文の「素読」ということがあり、老先生が理解よりも暗記を要求するかのようになり、「学びて時に之れを習う、亦た説よろこばしからず乎」と頭からただ朗読をしていく。生徒はそれにつれていつせいに音読するだけで、内容については、一言、二言、説明があるかなしであった。「子曰」を「シイワク」と読むことは冒瀆とされ、「曰」は「ノタマウ」と読まねばならなかった。いや、それでは足りない。孔子様という聖人がおおせられたということは、すなわち私たちにそうしたありがたいお言葉を賜ったことになるのであるから、「シ・ノタマワク」ではなくて、「シノ・タマワク」と読むべきであった。必らず「シノ」のあとに小休止を置かなければ吐られたのである。なぜ「シイワク」ではいけないのか。私は屈辱感をおぼえ、授業がいやでたまらなかつた。生徒たちは

みなこの教師をばかにして、授業中にほかの本を読んだり、居眠りをしようとする努力したりした。孔子の思想などわかってはるはずはなく、またわかりたいとも思わなかった。ただ、「怪力・乱神」(この四字は四つでなく、二つに分けて読むものと私は最近まで思っていた)とか、「義を見て為ざるは勇無き也」とかという言葉は記憶に残った。夏休みが来て、山登りしようか、海水浴に行こうかと考えたとき、「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」という句が頭にうかんだことがある。

中学の校庭にまでただよってきた大正デモクラシーの雰囲気存分に吸い込んで、やんちゃに生きていた中学生は、『論語』の名文に道学臭のみをかぎとり、それを読むことに何の喜びも感ぜず、学年末の試験がすめば、それで一生絶縁だと思いついていた。漱石、荷風などは前のめりになって読んでいたのだが、そこにある西欧風なもののみを嘆賞、摂取していたのであって、これらの文学者のうちにいかに深く儒学がひそんでいるかにはまったく思い及ばなかった。すべて少年の日の影響とはそうしたものが、いまになって反省してみれば、私における漢文趣味は、家君よりもむしろこの二文人からうつされたものようである。

私たちは、反儒教的な知的時代風潮のなかに浮かんでいたのであった。私たちが周囲に見かけた誠実なインテリたちは、儒教から一尺脱却することは、すなわち一尺新しい思想ないし美意識に近づくことだと信じていた。いや、それは言いすぎであるかもしれない。むしろ前方を見てまじめに勉強していれば、『論語』の世界などはおのずと後ろのほうに置き去られてしまう。力をこめて打

倒する必要もない老朽物だ。そう感じていたインテリが多かった、というほうが正確かもしれない。堯・舜ぎょうしゆんなどというのは、中学の老いぼれ教師は尊崇してやまなかったが、あれは歴史上の実在人物ではない。その程度のことは、高等学校へ進むころの私たちもぼんやりながらすでに知っていた。そんなものを聖王などと理想化している儒教など、まやかしものにすぎない。それが神武紀元はでっち上げであるという喜ばしい新知識と相乗作用をなして、反撥感と軽蔑をいっそう激しくしていた。私たちは津田左右吉の本など読んではいなかったが、この疑古派の学究が誠実に追究していたことを、およそ同じ方向で幼稚ながら感じていたのである。

やがてマルクス主義が日本の思想界に大きな力をもつ時期が来るが、左翼運動に挺身したまじめな学徒の生き方には、「朝あしたに道を聞かば、夕ゆうぐに死すとも可なり」という覚悟で、「志士仁人は、身を殺して仁を」なそうとした趣きがあり、青年に見すてられたかに見えた朱子学の厳格主義リゴリズムが共産主義運動の実践とかさなったことに気がつくものはほとんどなかった。

反動勢力が革命的進歩思想を抑圧するために、さまざまの伝統思想を利用しようとしたとき、儒教もまたその一翼をになわされたが、それは共産主義者を転向させるにあたって、思想として、差入れに行く母親の涙ほどの力も發揮することができなかつたようだ。下村湖人の『論語物語』などのじみな努力はあったが、深く青年の心をつかむには至らなかつたように見うけられる。そのうちに、孔子は神武天皇の思想的影響を受けたのだなどという珍説が飛び出し、それを正面から叩き切

る学者もない時代になって、儒教もまた「からごころ」(反国粹思想)として忌避されることとなる。敗戦後、思想の自由は復活され、マルクス主義は勢いを盛り返し、一方、アメリカ的なものの考え方に進路を見出そうとする人も多くなつたが、孔孟に戻ろうとする人はほとんど見られなかつた。

いま貝塚茂樹君の『孔子』(岩波新書、一九五一年)を読みかえすと、その「あとがき」には、「この伝記を書くことを勧められた友人吉川幸次郎君と桑原武夫君は、また原稿を閲読して有益な注意を与えられた」という謝辞が書かれている。私はすっかり記憶を喪失していたのだが、戦後、仙台から京都に帰り、人文科学研究所に勤めるようになってから、旧知の中国学者たちとの交際が復活し、中国文化への興味がまた湧いてきていたようだ。そして一九五四年には、吉川君と共著で『新唐詩選続篇』を出している。しかしそれは文学的あるいは美的なインタレストにとどまって、思想的ないし道徳的に惹かれるというのではなかつた。

だから、柳田国男先生と閑談の機会があつたとき(一九五二年)、明治の学者に比べて以後の学者が、西洋についての知識は深まつたけれども、全般的にどこか弱々しくなっている。その理由をお尋ねしたのである。先生が言下に、それは孝行という考えがなくなつたからです、と答えられた。私は、儒教復活には絶対反対です、などと揚言しえたのであつた。柳田さんは日本社会の現状をよくつかんでおられ、儒教の復活などできることではない、といわれたが、それは是認ではなく、諦念のことばであつたのだ(『学問を支えるもの』第四卷所収)。

一九五五年、日本学術会議の視察団の一員として中国を訪問した際、私は、歴史学界の巨頭、范文瀾氏ばんらんと会談した。孔子をどう評価するかという質問に、この延安にも立てこもったマルクス史学の大家から、孔子は偉大な思想家ではない、しかし、神などというものが存在するかのように見えるライブニッツやデカルトなどという連中よりは遙かにましである、という答えを得て、すっかり驚いたおぼえがある。彼はマルクス主義に立っているが、中国民族の生み出した文物を西欧の価値基準ではかることを拒否しているのである。地球上には、幾多の民族と幾多の文化がある。それをせいぜい四、五世紀前から世界支配的になった近代西欧文化を最高のものとする観点からのみ価値判断するだけでよいのであろうか。私はその所説に同調するものではないが、この革命家の姿勢に一種の美しさを感じた。

中国訪問が動機ではないが、私の儒教というより東洋思想一般にたいする考え方は、しだいに変わりつつあった。いつからと明確にすることはできないが、一九五八年に中江兆民の共同研究を始めたころには、その変化はかなりはつきりしていた。兆民はルソーらの西欧革新思想を学んだが、儒教的思想を残したところに保守的限界がある、といった従来の学界主流の考え方には、はつきり疑問を感じていた。孔孟の思想とフランス革命思想とは、必ずしも絶対矛盾するものではない(その親近性はクリールクリールの力説するところである。私はこのアメリカ学者の説にそのまま賛成するものではないが)。またかりにこの両者が矛盾するとしても、もしある人間が矛盾を内蔵しつつもすぐ



れた仕事をなしたとすれば、それでよいのではないか。いな、単純な公式的思想に立つ人よりも、矛盾のあるいは複合的な思想に生きる人のほうが、人間として強靱でありうるのではなからうか、と考えていたのである。

## 三

一 昨年の春、私が『論語』の通読にとりかかったのは、おおよそ以上に述べたような心境においてであった。それはあらかじめ孔子に敬礼をして出発するのではなく、また逆に、それを排撃すべき反動思想ときめ込むのでもなく、つまり先入見なしにページをめくっていったのである。そして快適な後味を残して読了したことは、すでに述べた。

考えてみれば、私は『論語』に長らく偏見をもっていた。中学生のころから、私は人生をできるだけ自由に生きたいものだと考えていた。それは決意とか覚悟とかいうるほどの毅然たるかまえといったものではなく、一種の幼い心的傾斜のたぐいにすぎないので、いまここに整理して書くのは、恥ずかしいばかりでなく、誇張ないし嘘になるおそれがあるのだが、あえて言ってみれば、こうである。

父親や先生といった目上の人が権威をもって抑圧するなら、面従腹背でやりすごし、心のなかで認めなければいい。心だけの問題にとどまらず、物的に現実の拘束がかりにあっても、それは永久